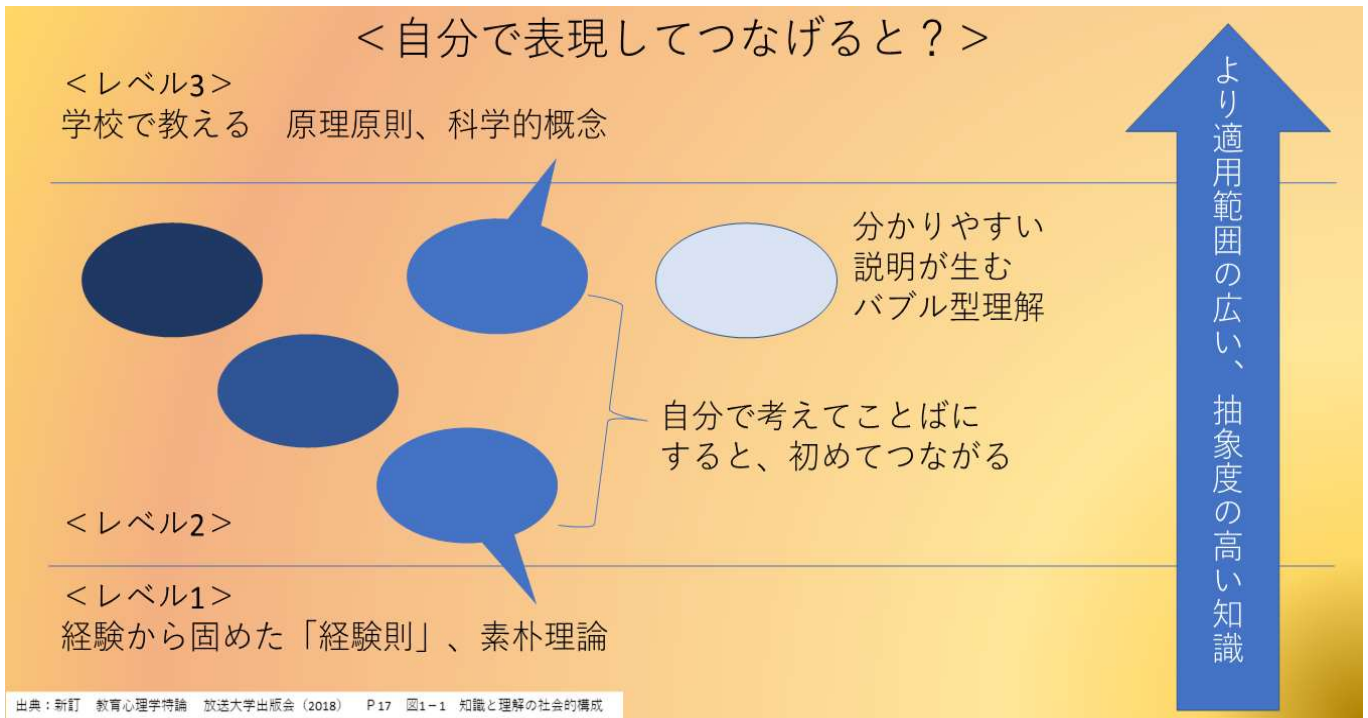


学習科学における学習プロセスの知見が示唆する 保育士の園内ミーティングでの相互学習の意義



この図は、学習科学の研究成果として見いだされた「人が賢くなる仕組み」の概念図だ。

人は生まれながらにして、経験から法則を見いだす力を持っている（例えば、「物は支えがなければ下に落ちる」という経験則）。学習というプロセスは、その経験則＝素朴理論を、社会的に検証されている原理や原則（「物体の間には、引力が作用している」という原理）へと昇華させるプロセスと考えられている。

このような「人が賢くなる仕組み」を前提とすると、上図の＜レベル 2＞の学習プロセスにおいて、「建設的相互作用」を引き起こすことが有効だとされている。

この「建設的相互作用」とは、「人が人とのやり取りを通じて、自分の考えをより抽象的で適用範囲の広い考えへと変えていくこと」である（白水始「対話力」東洋館出版社 p51）。

そして、「建設的相互作用を引き起こすことに関する特徴」として、次の7つの特徴が示されている。

（「新訂 教育心理学特論」放送大学出版会（2018） 147 ページ）

- ① 子どもたちが皆共通して「答えを出したい問い」を持っていた
- ② 問いへの答えを、一人ひとりが、少しずつ違う形で最初から持てる（そのように環境、事前状況が設定されている）
- ③ 一人ひとりのアイデアを交換し合う場がある、言い換えれば、皆自分のいいたいことがあって、それがいい

える

- ④ 参加者は、色々なメンバーから出てくる多様なアイデアをまとめ上げると「答えを出したい問い」への答えに近づくはずだ、という期待を持っている
- ⑤ 話し合いなどで多様なアイデアを統合すると、一人ひとり、自分が最初に考えていたのより確かだと感じられる答えに到達できる
- ⑥ 到達した答えを発表し合って検討すると、自分なりに納得できる答えが得られる
- ⑦ 納得してみると、次に何が分からないか、何を知りたいか、が見えてくる

上図の「自分で考えてことばにすると、初めてつながる」は、この「特徴」の③や⑥を表しているものと解釈できる。

さらに、この建設的相互作用の特徴を備えた、具体的な授業実践方法として、「知識構成型ジグソー法」という授業手法が考案されている。この授業法は、以下のような流れで、課題遂行役とモニター役(グループ内で、聞き役を一時的に引き受ける)を繰り返し担いながら、様々な部品や他者の視点を比較吟味、統合し、生徒自身が、自分の納得する「答え」の質を向上させていく授業法である(「新訂 教育心理学特論」放送大学出版会(2018)149 ページ)。

- ① まず教師から提示された「ひとりでは十分答えが出ない問い」に最初の考えを書き出してみる
- ② その問いの答えを出すためのヒントになる「部品」をいくつかの小グループに分かれて担当し(エキスパート活動)、
- ③ それぞれ異なる「部品」を担当したメンバーが集まった新しいグループで問いに対するよりよい答えを作り上げ(ジグソー活動)
- ④ 教室全体で出てきた答えを共有、比較吟味(クロストーク)、
- ⑤ 最後に個々人で問いに対する自分の納得いく答えを書いてみる

このような授業＝協調的議論の流れを見ると、保育関係者の皆さんにも、なんとなく思い出されるシーンがあるのではないだろうか。

指導案、指導計画を施設内のカンファレンス等で、集会的、協調的に検討するプロセスと似かよっていると言えないだろうか？

例えば、①の「ひとりでは十分答えが出ない問い」に対する最初の考えとは、クラス担任が指導案の原案を書くことに相当するだろう。そして、②の「部品」としては、いわゆる5領域ごとに役割を分担して、来月、来週の活動内容として時宜に適したものだろうと考えたアイデアが当てはまることになる。③では、各部品を持ち寄って、最初の原案の改良、改善を話し合うが、その中で、最初の原案を作成した保育士は、まずはモニター役になって、エキスパート活動の成果に虚心坦懐に耳を傾けることになる。そして、④の段階で、各クラスの指導案の改良案、改善策を比較吟味して、最後に⑤としてクラス担任が、最終的な指導案を書き上げるというプロセスだ。

全体の教師役は、園長、施設長ということになるだろう。

知識構成型ジグソー法という学習の方法論は、学校における「授業」を想定して、生徒の知識獲得(概念変容)のためのものとして考案されている方法論ではあるが、その背景に「人が賢くなる仕組み」への洞察が存在してい

る。それゆえに、プロセスをアレンジすることによって、専門職人材が直面する複雑な課題解決策の検討、改善のための方法論としても応用可能なのだと思われる。

また、このような学習プロセスを促進し、サポートし、かつ、このプロセス自体の質向上のための評価を可能とするようなITサービスの研究も行われている。具体的には、③のジグソー活動中の会話、対話の記録を自動的に生成し、振り返りを可能とするシステムや、このプロセスで利用される①や②段階の教材を教師間で共有し、コメントしあって、教師間のスキル向上をサポートするシステムなどだ。

保育施設運営における重要な課題として、保育士の育成という課題があることは、皆が重々に認識しているだろう。学習科学の成果も視野にいて、保育実践の中に、意識的に「学びの場」を作り上げていくことが必要なのだろう。

そして、保育実践の中での「学びの場」を効率化し、サポートするようなテクノロジーの開発を、躊躇する理由も全くないのだろうと思っている。

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当レポートは著作物であり、著作権法に基づき保護されています。当レポートの全文又は一部を著作権法の定める範囲を超えて無断で複製、翻訳、翻案、出版、販売、貸与、転載することを禁じます。